

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 2 日現在

機関番号：32612

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26370366

研究課題名(和文) 18世紀フランスの描写詩における自然描写の生成 博物学的著作の受容とその変奏

研究課題名(英文) The formation of nature description in the descriptive poesy of 18th century - reception of natural history works and variation

研究代表者

井上 櫻子 (Inoue, Sakurako)

慶應義塾大学・文学部(三田)・准教授

研究者番号：10422908

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,100,000円

研究成果の概要(和文)：18世紀後半のフランスで発達した描写詩は、自然の事物のさまざまな姿と自然の中に生きる人間の多様な情緒的経験を歌うものである。本研究は、描写詩における自然描写の変容に博物学的著作がどのように影響を与えているか明らかにした。さらに、描写詩、とりわけサン＝ランベールの人間論とルソーやディドロの著作、さらには『百科全書』との関連性についても検討した。そして、長い間等閑視されてきた描写詩というジャンルを再評価する必要性を強調した。

研究成果の概要(英文)：The Descriptive Poesy that developed in the second half of the Eighteenth Century of France, chants not only divers aspects of natural beings, but also various emotional experiences of human beings who live in the nature. This research revealed the influences of natural history works in the transformation of the nature description. It also examined the relations between the anthropology of Saint-Lambert and the works of Rousseau or Diderot, or the relations between The Seasons and the Encyclopedie. In this way, it insisted on the necessity to reevaluate the Descriptive Poesy, the genre that was neglected a long time.

研究分野：18世紀フランス文学

キーワード：仏文学 哲学 美学

1. 研究開始当初の背景

(1) 18世紀後半、フランス文学に自然描写という新たな美学を取り込んだのはルソーであるとしばしば指摘されてきた。しかし実際には、彼と同時代に活躍した詩人たちが競い合うようにして素朴な田園生活の美德を歌い上げていたこと、そしてルソーも少なからずその影響下にあったことが、本研究課題研究代表者が博士課程以来行ってきた文献学的調査から明らかになった。これが18世紀に特徴的なジャンル、描写詩である。

(2) 描写詩については日本国内のみならず、フランス本国でもあまりまとまった研究が存在しない。この分野における先行研究としては、エドゥアール・ギトンの『ジャック・ドリールと1750-1820年の自然の歌』(1974)および、1980年に創刊された年刊誌『ルーシェ＝アンドレ・シェニエ研究』に掲載される単発論文が挙げられるのみである。しかし、こうした研究のほとんどは、描写詩を文学的観点から分析したものであり、18世紀における人間論、自然の体系をめぐる思想的議論と描写詩の関連については、いまだ十分な検討がなされていない。そのため、本研究課題研究代表者は、博士論文執筆時より一貫して、ルソーやディドロなど啓蒙思想家たちの美学論考、人間論との関連から描写詩の分析を行ってきた。

(3) その上で、本研究課題研究代表者は、これまでの研究で培ってきた方法論を保持しつつ、それと並行して新たな視点から描写詩の分析を展開する必要性を認識し始めた。そこで、2011年より、描写詩に見られる自然の事物と18世紀のフランスで隆盛を極めた博物学との関連についての調査を開始した。まず、研究代表者は、ドリールの後期作品における自然描写の変容に、博物学的著作、とりわけビュフォンの『一般と個別の博物誌』の影響がどのように反映されているか検討を進めたが、その作業を通して、同様の視点からルーシェやドリールの作品を読み直す可能性があるのではないかと考えるようになった。これが、本研究課題を着想するに至った背景である。

2. 研究の目的

(1) 描写詩を手がけた詩人たち、特にサン＝ランベール、ルーシェ、ドリールが博物学的言説をどのように参照し、また変奏しているか明らかにすることが本研究課題の目的である。啓蒙の時代の思想家同様、詩人たちが博物学的言説を取り込みつつ事物の本性を解明しようとする試みを通して、西洋に古代から存在する田園詩の伝統を革新していく過程をたどることができるのみならず、18世紀後半における詩的言語の改革や、韻文と思想的議論との関わり、さらには自然科学と文学との関わりについて新たな回答を示す

ことも可能になると考えられるからである。

(2) 次に、これまで継続的に行ってきた描写詩に見られる人間論を、同時代の思想的著作との関連性から読み解く作業をより深化、発展させていくことも研究目的の一つである。描写詩についての研究が、文学の一ジャンルの解明にとどまるものではなく、より広くディドロやルソーといったこれまで多くの研究のなされてきた思想家の著作の再読にもつながると示す上で重要な作業と考えられるからである。

(3) 最後に、描写詩というこれまで等閑視されてきたジャンルに目を向けることが、18世紀の精神史を新たな視点から捉え直す契機となりえると示すことも本研究課題の目的の一つである。

3. 研究の方法

(1) まず、本研究課題研究代表者が博士論文執筆時より最も力を入れてきたサン＝ランベールの『四季』についての研究から一連の調査を始めた。『四季』については、サン＝ランベールが田園詩の系譜をどのように受け継ぎながら、独自の自然描写を展開しているか確認する。サン＝ランベールに関しては、ルソーやディドロをはじめとする同時代の思想家との関連性から『四季』に展開される人間論、とりわけ感受性と快楽に関する議論についても考察を深めていった。

(2) 次に、サン＝ランベールの後継者であるルーシェやドリールにおける自然の事物の描写に着目しながら、博物学的言説がどのように受容されているか検討を進めた。さらに、自然描写という観点からサン＝ランベールとルーシェ、サン＝ランベールとドリールの関係性についても考察した。

(3) 文献調査にあたっては、フランス国立図書館、パリ＝ソルボンヌ(パリ第4)大学図書館、フランス学士院図書館などフランスの図書館を利用した。描写詩や博物学的著作についての資料は、日本では入手困難なものが少なくないからである。平成26年度については、夏季休暇、春季休暇、平成27年度については夏季休暇を利用し、それぞれの休暇期間中にパリに2~3週間ほど滞在して資料調査を行った。また、平成28年3月から平成29年3月にかけて、本務校での研究休暇期間を利用し、一年間パリに滞在した。その結果、特に本研究課題研究機関最終年度は、効率的に文献調査を進めることができた。

(4) 研究の遂行にあたっては、主にフランスやスイスの研究者との間に築き上げたネットワークを活用して、意見交換を行いながら、研究の方向性が妥当なものであるか常に確認するように心がけた。具体的には、18世紀

の韻文については、研究代表者の博士論文執筆時の指導教授であるパリ第4大学名誉教授シルヴァン・ムナン氏、『百科全書』とその寄稿者についてはパリ第10大学名誉教授マリ・レカ＝ツィオミス氏の助言を受けた。また、研究休暇中のパリ長期滞在の折には、マリヴォーヤルソーの研究で知られるクリストフ・マルタンパリ第4大学教授、ディドロ研究で多くの実績があるピエール・シャルティエパリ第7大学名誉教授をはじめとして、さまざまな18世紀研究者と知り合いになり、それぞれの専門分野における最新の知見を教示いただく機会に恵まれた。さらに、スイスのバーゼル大学に拠点を置く共同研究班「ドリール再構築」の開催する研究会で発表を行い、同研究班のメンバーとも学術交流する機会も得られた。こうした国際的な研究ネットワークを今後の研究にも活用していきたい。

4. 研究成果

(1)平成26(2014)年度には、数年来取り組んできたサン＝ランベール『四季』批評校訂版をフランスの出版社クラシック・ガルニエ(Classiques Garnier)社より刊行することができた(5.「主な発表論文等」[図書])。これは世界初の『四季』近代批評校訂版である。この校訂版では、『四季』初版(1769年刊行)を底本とし、作者が生前最後に出した版(1796年版)に至るまでのテキストの変遷を明らかにすると同時に、この描写詩にみられるサン＝ランベールの人間論についての解説をほどこしたが、これがきっかけとなり、研究代表者はさまざまな国際学会での研究成果発表の機会を得られ、海外の研究者と研究上の緊密なネットワークを築くことが可能になった。

(2)まず、平成27(2015)年7月にはオランダ、ロッテルダムで行われた国際18世紀学会において、シルヴァン・ムナン氏およびフランス、スウェーデンの若手研究者とともに、サン＝ランベールに関するセッションを企画した。ここで研究代表者はサン＝ランベールの『四季』をこの詩人が『百科全書』に寄稿した項目「奢侈」との関連性から読み解く研究発表を行った(5.「主な発表論文等」[学会発表])。このセッション企画を通して、サン＝ランベールの百科全書派としての功績を捉え直す必要性に気づくことができた。平成28(2016)年11月にパリ第4大学で行われたジャン＝ジャック・ルソーセミナーでの口頭発表(5.「主な発表論文等」[学会発表])そして平成29(2017)年2月にパリ第6大学で行われた『百科全書』電子批評校訂版プロジェクト研究班での口頭発表(5.「主な発表論文等」[学会発表])も、国際18世紀学会におけるセッションでの研究成果を発展させたものである。また、バーゼル大学の共同研究班「ドリール再構築」のメンバ

ーの一人と出会ったのも、このロッテルダムでの学会においてのことである。その結果、パリ長期滞在を利用して、平成28(2016)年12月にバーゼル大学で行われた研究会にて研究発表の機会が得られることともなった。

(3)研究休暇を利用したパリ長期滞在中には、研究代表者が口頭発表を通してフランス、スイスの18世紀学の専門家に最新の成果を示すと同時に、研究の方向の妥当性を再確認することができた。平成28(2016)年11月パリ第3大学で行われた「ルソーとマイナー・テキスト」では、ジャン＝アントワーヌ・ルーシェの『一年の12ヶ月』にみられる自然描写に着目し、この詩人がルソーの著作から強い影響を受けつつも、同時にピュフォンの『一般と個別の博物誌』の読書経験をもとにルソーとはまたちがった自然のタブローを創造していることを明らかにした(5.「主な発表論文等」[学会発表])。また、前述のパリ第4大学でのジャン＝ジャック・ルソーセミナーでは、サン＝ランベールとルソーの美学的考察、人間論の相違を明らかにしつつ、これまで等閑視されてきたサン＝ランベールの著作に目を向けることが、同時代人によるルソー受容のあり方を捉え直すことに繋がりと示した。バーゼル大学の共同研究班「ドリール再構築」では、サン＝ランベールとその後継者ドリールの関係性について、自然描写、人間論、テキストへの加筆修正作業などに注目して検討した(5.「主な発表論文等」[学会発表])。そして、『百科全書』電子批評校訂版プロジェクトセミナーでは、『百科全書』の無記名項目「メランコリー」をサン＝ランベールの『四季』に展開される人間論と比較検討することにより、長らくディドロの筆になるとされてきた本項目が、実はサン＝ランベールの執筆項目であると主張した。こうした一連の口頭発表は、いずれもフランス、スイスの研究者たちに好意的に受け入れられたことから、研究代表者の研究成果が、国際的にも高水準のものとして認められていると言える。

(4)本研究課題を遂行する中で、当初予期しなかった成果が、サン＝ランベールの『四季』について研究代表者がこれまで行ってきた調査を、『百科全書』研究に役立てる可能性をみいだしたことである。現在、研究代表者は、『百科全書』電子批評校訂版プロジェクトチームからの依頼を受け、サン＝ランベールの執筆項目の校注作業にたずさわっている。『百科全書』電子批評校訂版プロジェクトチームにおける校注作業の意義については、フランスから帰国後、平成29年3月に慶應義塾大学で行われた『百科全書』・啓蒙研究会総会において、日本の18世紀研究者に紹介することも試みた(5.「主な発表論文等」[学会発表])。フランスで行われている最新の研究の紹介も、日仏の研究ネットワ

ークを緊密化する上で重要と考えられたからである。なお、百科全書派としてのサン＝ランベールの功績については、日本国内のみならず、フランスの『百科全書』研究者の間でも十分に認知されていないので、今後はこうした方面においても考察を進めていきたい。

(5) 上記のような国際的な業績を重ねる一方で、研究成果を定期的に日本語の論文にまとめ、本務校の刊行する紀要に投稿した(5. 「主な発表論文等」〔雑誌論文〕①～③)。その内容をより深めた上で、今後は『デイドロ・「百科全書」研究』など海外の査読付き学術雑誌にも積極的に投稿していきたい。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 3 件)

井上 櫻子、『百科全書』の無記名項目の執筆者同定 - 項目「利子、利益 Intérêt (Économie politique)」の場合 -、慶應義塾大学日吉紀要 フランス語フランス文学、査読無、63 巻、2016、19-30

井上 櫻子、サン＝ランベールの経済思想 - 『百科全書』の項目「奢侈」(1765)から『四季』(1769)へ -、慶應義塾大学日吉紀要 フランス語フランス文学、査読無、61 巻、2015、1-16

井上 櫻子、サン＝ランベールの『四季』改訂版における加筆修正作業 - 「不安」、「倦怠」、「苦痛」の概念をめぐる -、慶應義塾大学日吉紀要 フランス語フランス文学、査読無、59 巻、2014、1-14

〔学会発表〕(計 7 件)

井上 櫻子、ENCCRE における『百科全書』校注作業の意義 - サン＝ランベールの執筆項目「メランコリー」を中心に -、『百科全書』・啓蒙研究会総会、2017 年 3 月 23 日、慶應義塾大学(東京都港区)

井上 櫻子、「メランコリー」、サン＝ランベール(仏語による発表。原タイトル《Melancolie》, Saint-Lambert)、『百科全書』電子批評校訂版プロジェクト、2017 年 2 月 24 日、パリ(フランス)

井上 櫻子、サン＝ランベールの『四季』 - 田園詩、人間論、テキスト修正 - (仏語による発表。原タイトル *Les Saisons de Saint-Lambert - la pastorale, l'anthropologie, les remaniements du texte* -) ドリール再構築、2016 年 12 月 8 日、バーゼル(スイス)

井上 櫻子、サン＝ランベールとルソー(仏語による発表。原タイトル Saint-Lambert et Rousseau) ジャン＝ジャック・ルソーセミナー、2016 年 11 月 23 日、パリ(フランス)

井上 櫻子、ジャン＝アントワーヌ・ルーシェの読むルソー(仏語による発表。原タイトル Rousseau lu par Jean-Antoine Roucher) ルソーとマイナー・テキスト、2016 年 11 月 4 日、パリ(フランス)

井上 櫻子、サン＝ランベールの経済思想、項目「奢侈」から『四季』へ(仏語による発表。原タイトル la pensée économique de Saint-Lambert - de l'article « Luxe » aux « Saisons ») 国際 18 世紀学会、2015 年 7 月 29 日、ロッテルダム(オランダ)

井上 櫻子、ひとはどのようにして社会性を獲得するのか - ルソーにおける道徳性と快楽についての思索 -、「感受性の<不>連続性と教育 - イギリス近代文学におけるジェンダー編成の諸相」研究会、2014 年 7 月 19 日、上智大学(東京都千代田区)

〔図書〕(計 1 件)

井上 櫻子、STFM Classiques Garnier、サン＝ランベール『四季』(仏語。原タイトル Saint-Lambert, *Les Saisons*) 2014、340p.

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等
なし

6 . 研究組織

(1)研究代表者

井上 櫻子 (INOUE, Sakurako)
慶應義塾大学・文学部・准教授

研究者番号：10422908